

京都府立総合資料館
京鹿子祭
2019年1月1日発行
1000部

京鹿子

1月号

京鹿子祭特集号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その六十四

へばりつく川底の石冬に入る
相傘に早鐘を打つ初しぐれ
日溜りに火種がひとつ冬紅葉
掛違ふボタンの一つ冬の鵞
掛け算も割り算も嫌炭をつぐ
四^よ方^や八方の電池切れです蔓枯れる



数へ日や逃げの一手の香車打ち
聞き耳の寄り座のひとり雪をんな
山眠る虎穴と言へど眠り穴

平安神宮・岡崎動物園他吟行

五位鷺の水辺に遊ぶ苑小春
枯葛の這ふを忘るも神意かな
神池の濁り赦さず冬紅葉
猿山をどつと乗っ取る冬日かな
洛中に集まる不穩冬そこに

—
近詠
—

和田 照海



野風呂句碑

敗荷の風を楯とす自刃の碑
潮騒へ真向ひに干す蒔蕎麦
渡り来るしぐれ届かず野風呂句碑
鷹躲す浪の起伏を鵜の群
石鎚を遠拝みして島小春

—
近詠
—

松本 鷹根



小春日

誰も居ぬ漁港突堤に竹瓮乾す
額衝きて交す挨拶茶花咲く
雲浮かす遠嶺均らして小春風
大根干す別きに灯台夕映ゆる
小春日の雲なき空に寿命あり



琴の空音

父恩母恩に師の恩足せり系露の忌
笑つてみても悲しみ残る萩は実に
十三夜 琴の空音の尾を曳いて
実ざくろや裂けねば未来見えて来ず
稲架高し潮の香りの風が巻く

英華採集

船中八策編みし宿なり藤袴

京都 五十川 智恵子

坂本龍馬が起草したとされる新国家体制の基本となる船中八策は、長崎から兵庫へ向かう船で構築されたものであり、掲句の「編みし宿」は、それより以前に構想を温めていた定宿で材木商酢屋の二階のことであろう。この句で注目したのは、季語の「藤袴」である。藤袴と言えば蝶のアサギマダラであり、この蝶は二千キロメートルを飛翔するとされ龍馬の夢を乗せて運んできた、と読めば楽しい。

遣る瀬なき片見の月や十三夜

奈良 瀬尾 千鶴枝

古来平安の頃から旧暦の八月の十五夜の月と九月十三夜の月は両方を見るのが風流とされていた。古人は、十三夜の月をまた一緒に見たい、と想い人へ文を遣り取りしていたであろう。掲句は、何かの事情で十三夜の月が片見の月となってしまった不運を嘆いているのであるが、裏側にある故事を下敷きに読めば句の意図は読み手の心の中に広がってゆくに違いない。

名月や月に遅速のなかりせば

京都 川本 順美

月の満ち欠けの周期は、新月から約十五日をかけ満月へそしてさらに約十五日をかけ満月から新月へと形を変える。その月の呼称も、例えば二十六日夜の月を夜明けの空にのぼることから有明の月と呼ばれているように歳時記においても月の出の遅速によって季語が違うのは周知の通りである。掲句のように月に遅速がなければ全く味気ないものになってしまう。月の知識を増やすことで名月の楽しみ方も変わってくるだろう。

年新た 沼田巴字

世に残す一句あればや年新た
年新た百周年のめでたさよ
年を経て見えてくるもの去年今年
しづけさや行く人なしに初雀
文芸の奥の深さよ年新た

佛の火 丸井巴水

鉾先を風が邪魔する秋の蜂
掘らば涌く温泉秋の音満たし
冬そこにをとこ夢みるジャズ喫茶
もみじ葉の招きし洞に佛の火
岩風呂のぬるきが馳走秋日落つ

明の春 植村蘇星

天の声地の声鼓動初御空
煌々と浮かぶ天守や初明り
ほのぼのと差し来る曙光明の春
初空や己が草屋も皎々と
財無くも確と心に年始

草は穂に 北川孝子

草は穂にふり向くたびに山暮れて
野をよぎる風の気配や秋小島
初紅葉歳月音もなく迫り
過ぎし日のコスモス街道しぐれ雲
晩年は積木のやうに齢かさね

水澄む 直江裕子

三日月の坂を上げれば及ぶかに
なが生きの息の汚れを露しとど
月光の届かぬ傷の深さかな
はじまりは続きに過ぎず鱗雲
何ひとつ期せぬ贅沢水の澄む

別世界 伊藤希脾

咲き切つて曼珠沙華なる別世界
詭弁ともなほ眼を張りぬ捨て案山子
半農半漁半島の縁（へり）怒涛の秋
山もみぢ紅たぎる生命かな
足吊れりまだ残り香の晩秋

選ばれて 高木晶子

釘を打つ腕が頼りの颱風裡
コスモスの軸の太しよ色も濃し
足りるとは離れて咲くも曼珠沙華
選ばれて一夜の宴青芒
輝きて人を見てゐるだけの月

枯あぢさゝる 奥田筆子

枯あぢさゝるまだ完結をいそがない
独房にほぐれ晩季をもみづれり
綿虫の秒速漕ぐがごときなり
枯蔓の夫にけつこう縛らるる
かまきりのからくりほどのしんきくさ

神麓集

バックヤード

井上菜摘子

白熊やバックヤードの夜に覚む
読切り小説冬の蝶おきざりに
妹をずぶぬれにして冬銀河
脚注や石路が咲いたり難破したり
同齡のくすのきと凧の中

初 蝶

村田あを衣

海を描く画布へ初蝶まぎれ込む
白地図へ山河の一点冬灯
初鏡しばし素顔と向き合ひぬ
初夕日的に少年ボール蹴る
読初はアンドロメダの神話かな



京鹿子大賞受賞作品

福山市

石原孝人

箒目に影も寸跳び雀の子 躓くも迷ふも余生帰り花
夏霧のほどけて遠嶺新たなる 未知といふ無限の未来冬銀河
人影のふれて崩るる牡丹かな 波の影消しゆく波や冬落暉
不器用に空傾けて袋掛 小春日や路地の裏なる生花店
空蟬や年輪に問ふ樹の記憶 石仏の影につまづく冬の蝶
白南風や引き潮匂ふ朱の鳥居 奥つ城の白き音踏む霜の花
苔寂びて遊女の墓石秋の声 三日はや禁断の柵越す猿
古池や影を遊ばす赤とんぼ 田返しへまづは農機の空吹かし
冗談で済まぬひと言捨て扇 薄氷の光る音して壊れけり
銀杏散るひとひらごとの風の翳 湖に溶け入る落暉燕反る

花洛賞

福山市
石原孝人

木洩れ日の影を濃くして立夏かな

ここだけの筈の本音やおでん酒

人生に節目はいくつ七変化

紅葉散る白き記憶の中に散る

追憶の話は果てず夜の秋

糾へる薫に癖なき注連飾

洩るる灯もなき峰里や星月夜

あばらやの雪解雫や親子猿

赤とんぼ水車は水を裏返す

早春の木曾谷攻める靄の波

青秀賞

京都市
福森順子

早春の湖の微光や浮御堂

西陣や匠の揚羽帯に舞ふ

夜桜やシテ一声の闇揺らす

古浴衣縫ひ目に残る母の日々

はくれんの失意のごとく散りにけり

夕暮はかなかなしぐれ念仏寺

宇治川や武者盛衰の花筏

冬の蝶己が影さへ伴へず

一切を消す蟬しぐれ戻橋

ひと明かりして交番のポインセチア



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

みすずかる小諸の宿の今年米

京田 山中志津子

蘇我邸跡掘れば木の美のつぶて落ち

城陽 鷺山 珀眉

木洩れ日は森の溜息山粧ふ

密約は枝豆畑で成立す

翁句碑なぞる川風秋の色

京都 井尻 妙子

ひと先づは水音に癒す秋思かな

蚯蚓鳴くひいふう通夜の皿の数

笑ふのを止めて取り出す秋扇

何とかなる話ぶだうの房くづす

即答は控へてつまむ月見豆

告白をせずに別るる山の萩

福知山 西村 白籽

ゆれ止まぬものコスモスと少年期

父の声母の声して木の実降る

秋の蛇詩を残して水に消ゆ

渋柿の自身の生き方エトセトラ

待宵の夜風に笑むは石羅漢

萩あかり透けゆく先に水の詩

せせらぎの光に休む都鳥

秋水に雲の寄り添ふ二重奏

朝顔や都ことばの蔓のぼす

鉦たたき記憶の柱叩きをり

灯を消せば身の内に棲む虫のこゑ

美少女の羽化のはじまる神無月

過去へゆく我が一両車霧の街

白こすもす火宅の我に揺れ戻す

待宵や待つといふ事いつも不安

萩真白神の水音へ耳澄ます

空白のノート色鳥埋めにくる

白萩の白に紅足す余生かな

森の木の手づくり玩具小鳥くる

名水の息遣ひ秋気澄みをり

サクスの音色の愛し^{かな}星月夜

決めごとは白紙へとこほろぎの夜

ぬのこづち相槌打つてしまひけり

窓際に紅茶を二つ鶺鴒和

急がねばつくつくぼふし夕陽よぶ

横糸の節の光陰単帯

鉦叩鎮守はいまも昭和なり

夕さりて誰を悼みたるつくつくし

羅や風のこころを首すぢに

船中八策編みし宿なり藤袴

京都 五十川智恵子

新涼や龍馬寓居の太き梁

草芥は露となりたる志士の宿

先斗町の道巾狭し残暑かな

遣る瀬なき片見の月や十三夜

鬼胡桃廃村へ向く深轍

子離れを決める一幕運動会

大花野誰かどこかで「おおい雲」

名月や月に遅速のなかりせば

夫と猫秋の厨に弾むこゑ

秋灯し人待ち顔の暖簾ゆれ

愛猫の葉を忘る月今宵

昨日より地球半周今日の月

秋の水真心を汲む茶の湯かな

秋の灯や名残を惜しむハイウェイ

喜びを分かちあつて良夜かな

